

19th International Symposium on Cells of the Hepatic Sinusoid

2017年6月14日～17日にGalway, Irelandで開催されます。
詳細は、<http://www.ischs2017.ie>でご確認ください！

第31回肝類洞壁細胞研究会学術集会

開催日：2017年11月24日(金)、25日(土)

会 場：三重大学医学部附属病院外来棟5階ホール

当番世話人：竹井 謙之

特 別 講 演：和氣 健二郎先生

「肝類洞壁細胞研究の史的展望」

特 別 講 演：塚本 秀和先生

「タイトル未定」

代表世話人基調講演：河田 則文先生



ごあいさつ

第31回肝類洞壁細胞研究会学術集会

当番世話人

三重大学医学系研究科

臨床医学系講座 消化器内科学

教授 竹井 謙之

第 31回肝類洞壁細胞研究会学術集会の当番世話人を拝命し、大変光栄に存じます。学術集会は2017年11月24-25日、三重大学医学部附属病院外来棟5階ホールでの開催を予定しております。本研究会は肝類洞壁細胞の研究を通して病態解明と治療学の展開に貢献してきました。類洞を場として肝実質細胞と類洞壁細胞群が織りなす情報のクロストークはあらゆる肝機能発現の源泉であり、類洞壁細胞の生理学とその障害過程を明らかにすることは、肝障害機序を解明し病態への深い洞察に繋がります。

本学術集会では肝類洞壁細胞の研究の軌跡——真理の継承と変化の受容が同時に起こる雄渾なる学問のドラマ——を追体験し、先人たちが示した光輝ある道標に導かれつつ、類洞壁細胞学の未来を探訪してみたいと考えます。肝類洞壁細胞研究に大きな足跡を残してこられました和氣健二郎先生に「肝類洞壁細胞研究の史的展望」というタイトルでご講演いただきます。また塚本秀和先生には、肝類洞壁細胞研究の最先端と未来をお話しいただく予定です。シンポジウムや一般演題では肝類洞壁細胞学の最新の情報を発表していただき、研究会ならではの真摯な討論ができればと思います。多くの会員の先生方のご参加をお待ちしております。

SINUSOID NEWS 編集部 編集長：河田 則文 編集委員：池田 一雄

〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3 TEL：06-6645-3897

大阪市立大学大学院医学研究科 肝胆膵病態内科学内

肝類洞壁細胞研究会事務局

Email：sinusoid@med.osaka-cu.ac.jp

SINUSOID NEWS

Vol.13

肝類洞壁細胞研究会

2017.5

pick up 1



肝類洞壁細胞研究会
代表世話人 河田 則文
就任挨拶

pick up 2



和氣健二郎先生
EASL International Recognition Award
受賞のお祝い
(池田 一雄より)

Information

- 19th International Symposium on Cells of the Hepatic Sinusoid
- 第31回肝類洞壁細胞研究会学術集会

肝類洞壁細胞研究会 代表世話人就任挨拶

大阪市立大学
大学院医学研究科
肝胆脾病態内科学
教授 河田 則文



2017年1月より、谷川久一先生、渡辺純夫先生の後任といたしまして、伝統ある肝類洞壁細胞研究会の第三代目の代表世話人に就任いたしました。偉大な先輩お二人の後を引き継ぎ、本研究会をさらに発展させるべく全力で任に当たりたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

ご承知のとおり、肝類洞壁細胞研究会は、谷川久一先生、故市田文弘先生、故浪久利彦先生、故高田昭先生を中心に発足し、谷川久一先生の御世話で第11回までは毎年12月に福岡県久留米市のホテル翠香園で開催されました。本研究会の特徴は基礎研究者と臨床医が垣根を超えて議論し懇親を深めることであり、事実この分野の世界的権威、和氣健二郎先生にも会の中心的役割を担っていただきました。第1回研究会（私は出席できなかったのですが）は準備委員会を兼ねた会であったとお聞きしておりますが、2回目以降は演題募集を行い、多数の演題と参加者が集う活発な会となり、最盛期には200名を超える参加者がある会となりました。12回目以降は当番世話人を交代制で決定し、世話人が開催地

やプログラムを決める形式で現在まで継続しています。本会はその名の通り、類洞壁を構成する細胞群の形態学、細胞生物学を主テーマとしておりますが、肝臓の炎症や線維化、さらには発がんは肝細胞や胆管上皮細胞、肝臓に浸潤する炎症細胞、骨髄細胞など多種多様な細胞の相互作用で病態形成されます。従って、本研究会では類洞壁細胞を中心とする細胞社会学により、肝臓の生理・病理・病態を、特に臨床に則したテーマで議論することを継続してゆきたいと考えております。それらには、ウイルス性・非ウイルス性の急性ないし慢性肝障害、アルコール性・非アルコール性肝炎、肝線維化・肝硬変・肝不全、肝がんや肝再生など全ての領域の肝病態が含まれます。また、肝臓と脾臓、膵臓、消化管など多臓器関連も今後の重要なテーマとなりえます。

私自身もそうですが、肝類洞壁細胞研究会で活躍され、鍛えられた多数の先生が教授になられており、種々の学会でも活躍されつつ後輩の指導にあたられています。また、本研究会の特徴は海外研究者と人脈を持たれている先生が参集されていることであり、特別講演などでは国際的に著名な先生とお会いする事ができます。一方、類洞壁細胞研究分野においても研究レベルは急激且つ格段に高くなり、分子・遺伝子生物学的研究手法を駆使して解析をより深める事が求められています。本会を通じて多くの若手医師・研究者に肝臓研究の楽しさ、厳しさを味わっていただき、我が国を代表する医学研究者への道を歩んでいただきたいと思います。

EASLから始まり、今年が12年目で、これまでに約30名の研究者が受賞しているとのことです。僥越ながら、門下を代表致しまして、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

和氣先生は、1932年大阪のお生まれで、府立大手前高校をご卒業後、研究の道を目指して理学部に進みましたが、ご実家の医院を継ぐため大



阪市立大学医学部に再入学されました。大学卒業後1年間の医師実地修練の後、大阪市立大学大学院に進まれ、鈴木清教授が主宰する解剖学第1講座で、形態学の研究を開始されました。1963年大阪市立大学解剖学助手、1964年同助教授、2年間（1971～1973年）の西ドイツ、ギーセン大学ご留学の後、1976年東京医科歯科大学解剖学第1講座に教授として着任されました。1997年東京医科歯科大学ご退官後も鶴見大学客員教授、大阪市立大学客員教授として現在も研究を続けられています。また、これまで、1967年大阪市長賞、1994年ドイツ連邦共和国エルヴィン・シュタイン賞、1995年日本電子顕微鏡学会賞、2012年瑞宝中綬章を受章されています。

和氣先生のご研究は、肝星細胞をはじめとして、網内系、リンパ球、樹状細胞と肝類洞壁細胞だけを取っても多岐にわたり、紙面の都合上省略せざるを得ませんが、私が大学院生時代に最も興味深く拝聴した事柄を三点あげさせていただきます。一つ目は、星細胞のスパインが肝実質細胞に接着し、星細胞のポンプ機構が、類洞—Disse腔間の液性交換を促進する可能性を指摘された事です。二つ目は、従来のDisse腔の定義が「内皮細胞と肝実質細胞の空隙」とされ、肝星細胞がDisse腔内に位置していることは観察結果に合致せず、Disse腔とは、「内皮細胞と星細胞との細胞複合体が肝実質細胞との間につくる空隙」であると新しく定義されたことです。そして三つ目は、20-40個の肝実質細胞と接着する星細胞を機能単位とする“Stellon”（星細胞単位）を提唱されたことで、これらは、現在も私の研究テーマとさせていただいているところです。

私が和氣先生にはじめてお目にかかったのは、1994年、外科の大学院に在籍していた時で、肝切除前の門脈枝塞栓術による塞栓葉の形態学的変化について、和氣先生が開催された京都での国際類洞壁細胞研究会での発表の少し前にdiscussionしていただいたものと記憶しています。また、Scott Friedman 教授のlabへの私の留学の時にも和氣先生

に推薦していただき、大変お世話になりました。留学中にFriedman教授から伺ったのですが、1996年に肝星細胞の名称が、stellate cell に統一される前は、lipocyte, fat storing cell, perisinusoidal cell, Ito cell, stellate cell 等様々でした。そこで、名称を統一するためFriedman教授が、世界の肝臓研究者約100名にアンケートしたところ、和氣先生の意見が最も説得力があり和氣先生の意見に落ち着いたと伺いました。和氣先生の主張は、この細胞の研究のプライオリティを尊重する立場から、発見者であるCarl von Kupfferの命名に従い、stellate cell（星細胞）とするというものでした。詳細は「肝類洞壁細胞研究の百年」解剖誌72:407-423（1997）を参照いただければと思いますが、その要旨をご紹介します。

1876年、ドイツの解剖学者のKupfferは、塩化金法で染色される星状の細胞が類洞周囲に数多く散在していることを発見し、Sternzellen（星細胞）と命名しました。その後Kupfferは、1898年に墨を静注した標本で肝類洞に存在する「特殊な内皮細胞」に墨が取り込まれると報告し、この細胞が自身の発見した「星細胞」であると結論し、「星細胞は類洞周囲の結合組織細胞」として以前の見解を改めたのです。このKupfferの錯誤によりその後の類洞周囲の結合組織細胞の報告には暫く時間を要することになりました。日本においても群馬大学の伊東俊夫教授が、脂肪を蓄える類洞周囲細胞をfat storing cells(脂肪摂取細胞)と命名し報告しました。和氣先生は様々な報告を追試し、塩化金法、ゴルジ法、ビタミンAの蛍光法、鈴木氏の鍍銀法で示された「多くの名称が付されていた類洞周囲に存在する結合組織細胞」が、実は全て同一のものであることを明らかにされたのです。これは、まさに和氣先生の長年のご研究に基づいた提言であったわけでした。

このように和氣先生は、まさしく「学者」と呼ぶにふさわしい研究者ですが、研究に対するpassionは全く衰えを知らず、現在も兵庫医科大学、国立感染症研究所とは「肝炎ウイルスと星細胞の関係」について、また、鶴見大学、大阪市立大学と動物実験で、「星細胞の活性化のイニシエーション」に関して共同研究をされ、新たな知見を見いだされています。

和氣先生の今後のますますのご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



和氣健二郎先生

EASL International Recognition Award 受賞のお祝い

大阪市立大学
大学院医学研究科
機能細胞形態学 教授 池田 一雄

この度、和氣健二郎先生が、欧州肝臓学会（EASL）のInternational Recognition Awardを受賞されました。この賞は、2006年の